

マラウイの都市と農村——●矢内原 勝

マラウイは英領植民地時代ニアサランドと呼ばれ、北ローデシア（今日のザンビア）および南ローデシア（今日のジンバブエ）とともに中央アフリカ連邦を形成していたことがある。そのなかにあつてニアサランドの経済的役割は銅生産国北ローデシア等に対する労働力供給であつた。南ローデシアは気候が快適で白人の定着に適したので、植民地行政の中心がここにおかれた。

サハラ以南アフリカの顕著な労働力供給地域としては、西アフリカのサハラ南縁・サヘルに位置するブルキナファソ、ニジェール、マリ等があげられる。これらの地域は乾燥地帯で主要農産物はミレット等の雑穀であり、土は固く農繁期は雨季に集中し、農閑期にはギニア湾沿岸の熱帯雨林地帯に出稼ぎに行った。現金収入稼得機会が居住地域内に乏しかったことが、出稼ぎの主要な要因である。マラウイも鉱物資源に恵まれない農業国であつたので、ローデシアや南アフリカ共和国の鉱山、農園、家事労働に雇用を求めたのである。今日ザンビアの出稼ぎは銅産業の停滞などによって衰退し、またバンド終身大統領の、国民の雇用は国内で与えるという方針によって出稼ぎ行為は奨励されておらず、1970年代より出稼ぎ者の帰国が激増した。マラウイの朝は早く、8時に銀行は開くが、開店前より人が並び、ザンビアや南アフリカの通貨をマラウイ通貨と交換する者もお見られた。

マラウイの気候条件はサヘルとはまったく異なるが、自国内での現金収入稼得に比べて出稼ぎのほうがかつては有利だった。今日ではマラウイの大農場の労働需要が急速に増加している。それでも1983年の1人当り国民総生産が210ドルのマラウイは最貧国に位置づけられるが、その経済の実情はどうであろう。

マラウイの高度はゾンバ台地が海拔1500メートル以上、リフトバレーの底地でも500メートル、国の大部分が1000メートルを越えている。樹林地帯が多く、ゾンバ近郊にはみごとに植林もみられる。私が訪れた時期は10月中旬の雨季直前で、農民は畑の耕起に忙しく、ジャカラングは満開で、はらはらと青色の花が散り、ムズズ市のジャカラングの並木は、バリのリュクサンブール公園から天文台に向うマロニエ並木を想起させた。車を陽なたに駐車しておけば、乗り込んだときは暑くてたまらないが、走り出せばたちまち涼しい風が吹き込んでくる。マラウイは私の予想どおり、花咲きみだれる涼しいアフリカであつた。この国に必要なのは暖房であつて冷房ではない。

マラウイには三つの主要都市、リロングエ、ゾンバおよびブランタイアがある。首都のリロングエは新しく造成された官庁街をもつ。その景観はインドのニューデリーを思わせる。広大な敷地は造林され、近代的な官庁舎、国会図書館、プリティッシュ・カウンスルなどが点在する。

マラウイ中央銀行は上に行くにしたがい床面積の拡大する、故吉阪隆三氏設計の八王子「大学セミナー・ハウス」の中央棟に似た建物である。このような建物の建設にあたり、南アフリカ共和国の援助を受けたことは、アパルトヘイト反対の建前とは別に、この国の労働力が南アフリカにとってなお重要であり、貿易においても両国間の密接な関係を反映している。最貧国マラウイが新しい首都の建設に要した費用を、たとえば農業開発に向けたほうがよかつたのではないか、という疑問も残るのは当然である。

旧首都ゾンバは今では学園都市になっている。ここにはマラウイ唯一の大学、チャンセラー・カレッジがあるが、校舎は近代的建物であり、マラウイの将来を担う学生の授業料は無料であつた。ところが最貧国マラウイに融資している世界銀行やIMFから見れば、リロングエの都市計画と同様、望ましくない国家予算の消費になるので、その干渉により、授業料は有料となり、かなりの学生の退学が予想されている。新しい独立国の理想が現実の経済力のまゝに色あせるのはやむをえないことなのであろうか。



ブランタイアはマラウイ最大の人口をもつ産業の中心である。内陸国マラウイは輸出・輸入ともに外国の港を経由しなければならず、ブラン

通

タイアは鉄道とトラック運送の重要な中継地である。プランタイアの貨物のヤードはともかく、乗客駅は日本のローカル線の駅程度で、小さなプラットフォームに野菜をかかえた農家の女たちが、翌朝の列車を待つて夕方からたむろしていた。プランタイアには商店街も発達しており、夜も町を散歩できる。マラウイでは例外的な町である。

これら三都市に共通に、近代的商店とは別に伝統的マーケットがあり、そこには衣料、靴、野菜、マラウイ湖でとれる鮮魚、干した小魚等がみちあふれている。バスの発着所の賑わいにしても、これらはサハラ以南アフリカ諸国の都市の景観にまったく共通している。

主要な国道は舗装されているが、両端は土が露出しており、すれちがいの際には舗装されていない部分に車が入るが、土は固くとくに問題はない。街道筋の町には、道路より引き込んだ空地があり、ときに商人が野菜類を並べているが、その先には飲食店、簡易宿泊所、ガソリン・スタンド等の彩色されたコンクリートの建物が町の規模に応じて並んでいる点は、これまたアフリカにきわめて共通しているところである。

農村については、多くの農家が牛も飼っている。マラウイでは牧畜と農業との間の部族別分業はないように見受けられた。私の調査したリロングエの中心地より10キロメートル離れた農村でも牛囲いを持っている。この村の住民の半数はよそ者なのであるが、よそ者は居住権は与えられるが耕作権は持てない。よそ者は本来の村民の雇用労働者となるか、リロングエ市への通勤労働者である。私の接触した農家も、主人はリロングエ市の政府機関に会計係として勤

めており、早朝と休日は農業に従事している都市近郊農家である。ともろこし、野菜、砂糖きび、タバコ等を栽培しているが、タバコを除いては自給用である。周囲はすべて親戚であって住居は一つの屋敷を形成していないが、明らかに一つの共同



農業単位である。穀物倉、牛囲いは共同のものであり、たとえば牛の所有者は個別農家であっても、放牧は牧童に委託している。土地所有者は村の首長であるが、実際には農地は農家ごとに分配されており、相続は各農家に行なわれる。したがって息子が複数いれば、次男以下が農業外に雇用を見出せなければ、耕地の細分化の問題が生じる。この村の人口は約1000人であるが、南アフリカ共和国に出稼ぎに行った者はむしろ例外で1%ぐらいにすぎない。たとえ換金作物であるタバコの価格が上昇しても、主食であるとうもろこしの生産は縮小しないという、危険回避的（リスク・アバーター）農民である。

マラウイの主要輸出商品であるタバコは収穫期が終わったあとだったが、もう一つの輸出品である茶を栽培する茶園は、プランタイアからムランジェへ行く道筋でみごとに展開されていた。茶は日常の手入れが必要であり、また収穫から加工までの時間が短いことを要求されるので、主に小農ではなくプランテーションで経営される。かつてはイギリス人

信

の茶園であったものも、現在ではマラウイ人企業家の経営となり、小農のために政府の管理する茶園もある。マラウイ国内で、たとえば「コパー・ティップス」という銘柄が250グラム、1クワッチャ・23タンバラ（約160円）で市販されているが、茶のように、世界市場での販売にはブランドが重要な商品にとっては、マラウイ国産の茶のそのままの輸出は困難であろう。

マラウイ国民の事務能率はかなり高い。電話事情もきわめてよい。地方都市のホテルの予約も電話ですむ。もっとも公衆電話はないから、電話をかけるにはホテルのフロントを利用するのが便利である。この点はナイロビの事情と似ている。またマラウイ国民は外国人に対してきわめて友好的であり、親切である。

しかしながらマラウイは農業国であり、食糧については自給自足が可能なので、飢えのアフリカとは縁遠いが、最貧国にはちがいない。政権は安定しているとはいえるものの、バンダ大統領は高齢であって、後継者の問題は当然おこる。女性がバンダ大統領の肖像のプリントされた衣服を一着持たされるような体制にも不安を感じる。

治安がよいこともあり、日本の海外青年協力隊員が1985年10月10日現在89名（女性34名）活躍している。ただしマラウイ国民は英国のよい伝統を守り、きわめて丁寧な英語を使っていることを考慮に入れる必要がある。英語の下手な理数教員は拒絶されるのである。善意は一方的であってはならない。

（やないはら・かつ/慶応大学経済学部教授）